

令和2年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立 桜島小学校					
評価項目	本年度の重点取組	具体的な取組と指標 * 活動指標	成果と課題	学校関係者評価	今後に向けて
1 学力保障	・子どもが見通しをもって粘り強く学習に取り組む授業づくり	意欲をもちづらい児童への働きかけの工夫 ・子どもの生活に関連させた課題づくり ・子どもの意欲や気づきを引き出す「しかけ」のある課題づくり ・具体物・半具体物を活用した授業づくり * (児童アンケート)「国語・算数の勉強は楽しい」…80%以上	○児童の意欲につながる教師の工夫や努力を継続する。 例)課題を生活に関連させる・具体物を活用する ○児童アンケート「算数の授業は楽しい」…1・2学期ともに83% ○「先生の話や友だちの意見をよく聞いている」…1学期94%、2学期93% ▲効果のあった取り組みを共有する機会が十分とれなかった。 ▲つまづきや困り感をもって児童にとどのような指導が有効か、各学年で話し合い、意欲的に学習に取り組める授業、学級づくりにつなげていく。	・80%の子どもが勉強は楽しいと回答していることは大変評価できる。 ・信頼関係の中での授業となっている。 ・児童アンケートで、「国語・算数の勉強は楽しい」と答えている生徒が80%いるというのは、先生の授業づくりが成功している証明だと感じた。 ・楽しく感じていない子どもたちへ視点をあてた指導についても検討・改善されることをお願いしたい。 ・端末導入になった時、個別の指導に十分な配慮が必要と思う。	・校内研修の充実をはかり、今年度効果のあった取り組みを継続・発展させる。 ・自主研修の時間を保障し、気軽に学びあえる場づくりを推進する。 ・一人1台端末が導入されることに伴い、全学年でICT機器等を活用した、分かりやすい授業づくりにより努める。また、ICT教育を推進するための組織づくりにも取り組み、学年で統一した指導を行う。
	・少人数指導による一人ひとりの子どもの学びの充実	・週5時間の少人数指導の実施 ・全体研修:3回学年研修:3回実施 4年算数 160時間(週5H) 5年算数 160時間(週5H) 各コースの子どもに合わせた課題の工夫(自力解決につながる取組) ・人数を絞って一人ひとりの考えを把握し、つまづききいていないに対応する ・上位グループでは子どもの意見を引き出すことを意識し、発展的な学習やよりよい計算方法の検討したりする学習に取り組む * (分かる授業アンケート)「算数の授業はよく分かる」…80%以上	○上位グループにおいては、子どもの気づきをもとにした授業展開を行うことが多くの場面で可能であり、子どもの意欲につながっている。 もった。 ▲授業の進め方は担任の裁量によるところが大きく、学年で綿密な打ち合わせが必要であるが、その時間が確保できない点が課題である。 ▲低学力傾向の児童の単元テストの成績向上、授業中の意欲の向上に大きな成果がみられている。しかし、単元テストの成果は出ているもの、時間が経過した後も定着が図られているか、という点において課題がみられる。	・児童アンケートで、「算数の勉強はよくわかる」と答えている生徒が80%以上という結果は、理想的だと思う。少人数で勉強することにより、つまづきに丁寧に对应してもらえて、「よくわかる」と感じる生徒も増えているのだろう。 ・少人数の良さを活かして低学年の子どもたちが「理解することの喜び」や、「もっと知りたい」と望む気持ちを大きく育てる指導を続けてほしい。 ・小学生のうちから、クラス分けすることで、問題点はないのだろうか。	・児童の実態に合わせて、少人数やティームティーチングなど、授業形態を工夫し、ひとりひとりのつまづきに丁寧に寄り添う。 ・指導教諭を中心として、授業改善に取り組み、子どもの意欲を向上させるスキルを身に付ける。また、学習内容の定着を図るため、児童の学習状況を的確に把握するための評価方法を見直す。
2 特別支援教育	・配慮・支援が必要な児童への取組の充実	支援ファイル、個別の指導計画等を活用した校内関係者会議の充実 * 支援会議20回	○学校全体で児童を支援するという意識が定着しつつある。 ○支援員やスクールライフサポーター、スクールカウンセラーとも常に情報共有し、支援方法についての検討を重ねてきたことで、その時に応じた丁寧な支援をおこなう程度、届けることができた。と考える。 ○昨年度から課題となっている、支援会議の時間設定については、校内支援会議を休憩時間や放課後の短い時間に行うことで、ある程度対応し負担を減らすことができた。支援会議は20回実施。 ▲課題としては、人的配置であるが、地道に行政に働きかけていくことが大切と考えている。	・支援会議20回というのは、忙しい中、頑張って時間を作ってもらっていると感じた。 ・配慮・支援が必要な児童へはチームで対応することが必須で、この点では、上手く対応いただいていると思う。関係者が情報を共有し、全員で子どもを見守り・育てていく体制をお願いしたい。 ・個々の教員の悩みやストレス軽減に配慮することも忘れずに対応をお願いしたい。 ・より一層の情報共有を望む。	・毎日の欠席状況等を職員室のホワイトボードで共有し、電話連絡や家庭訪問、適応指導教室での対応がスムーズにできるようにする。 ・特別支援コーディネーターが中心となり、支援員、スクールライフサポーター、スクールカウンセラー、教職員で情報共有を密にし、全職員で支援するという意識を引き継いでいく。 ・支援会議は必要に応じてすぐに開催できるように、関係職員で対応する。会議時間を設定し、長期欠席や不登校の減少に努める。
	・多文化共生教育の取組の充実	外国につながる児童理解のための取組 * 学習活動の充実・バンドスクールの作成	○全ての学年において多文化共生教育を行った。今年度は人権教育の中で多くのクラスが外国籍児童を核にし、共生について理解を深めることができた。 ○学習活動においては、国際教室の担当が在籍学級へ支援に入ったり、国際教室で取り出し授業を行ったりしている。母語や日本語で補足することで理解が進み、少しずつ学習に自信がついてきている。 ○今年度は全職員でバンドスクールおよび日本語指導についての研修会を行うことで、同じ知識や意識をもって支援にあたる体制を整えることができた。バンドスクール会議において児童一人一人の課題を把握し、具体的な支援につながっている。今年度の支援が来年度にスムーズに引き継がれ、日本語支援の必要な子ども全てが安心して学習できる環境づくりに引き続き取り組みたい。	・関わり方を考える取り組みはともよい。 ・外国籍の子どもたちが、桜島小学校で学んで良かったと思えるような環境づくりをお願いしたい。 ・全職員が日本語指導等についての研修を行っている点は、素晴らしいことであり、引き続き取り組んでほしい。 ・今後も子どもたちが外国の文化等に触れ合える機会を多くしてほしい。 ・コロナ禍ではあるが、1学期73%が2学期74%とほぼ変わらない点については、取組みの仕方を改善することも必要かと思う。 ・不安や困り感があつた時、手を差しのべられる、助けを求めることができる、そういったクラスづくり、学校づくりをしていただきたい。	・国際教室担当が中心となり、全校で多文化共生教育に取り組む。 ・バンドスクールや日本語指導の研修を行い、児童理解や指導についての共通理解を図る。
3 人権教育	・自尊感情を高める取組の充実	肯定的な言葉を日々届ける取組 * (児童アンケート)「自分にはよいところがあると思う」…70%以上	○全校で、毎週木曜日に「生活つくり方」に取り組んでいる。そして、必ず担任が共感したことや解決に向けての提案などを書いていく。また、児童が書いた内容に価値があることも書いて伝えている。 ○学校生活の様々な場面で、子どもたちの表現や行動をとらえ、その子の表しのよさを「何が、どのようによいか」、すぐに伝えている。 ▲児童アンケート「自分にはよいところがあると思う」について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は1学期73%、2学期74%であった。「あまり思わない」「思わない」と答えた児童には特に、その子が納得することができるよさを具体的に伝え続ける必要がある。そのため、教師がその子ならではのよさを発見し、伝え続けることが重要である。	・担任の先生が、子どものよいところを伝えてくれたということは、私の子どもからも聞いている。生徒をよく見て、日々肯定的な言葉を、子どもたちに届けてくれたのだと実感している。 ・児童一人ひとりのよいところを認め、自尊感情を高める取り組みを大切にしている。感じ方、捉え方はそれぞれ違うので、その手が満たされる言葉で伝え続けるというところは家庭でも大切だと思う。 ・コロナ禍ではあるが、1学期73%が2学期74%とほぼ変わらない点については、取組みの仕方を改善することも必要かと思う。 ・「生活つくり方」などの取組を継続していくことが大切である。	・「生活つくり方」に表れた子どものよさを見取り、どのように学級全体で共有していくかを、具体的な「つくり方」をもとにして職員が学びあう場を日常的に持つ。 ・日々の学校生活の中で、子どものよさを丁寧に伝えるための肯定的な言葉を増やし、運流し合う。
	・周りの人を大切にする仲間づくりの充実	いじめや差別を許さない取組 * (生活綴り方)児童理解、なかまづくりの取組(人権アンケート)「人を傷つける言動や決めつけは、いじめや差別につながる」…90%以上	○1学期始業式から、新型コロナウイルス感染症に関するいじめや差別をしない・許さない取り組みをしてきた。その結果、子どもたちは、「自分だったら」と自分に引き寄せて考えるようになった。また、学校生活の中における、いじめや差別につながる出来事について、すぐに事実を確認し、自分の立場性を明らかにし、自分事として考え、解決に向けて行動することができるように取り組んでいる。人権アンケート「人を傷つける言動や決めつけは、いじめや差別につながる」について、「そう思う」「ややそう思う」と答えた児童の割合が、7月89.8%から12月96.5%と増えていることから、どういことがいじめや差別につながるのかを意識するようになってきたことがわかる。 ○「生活つくり方」の取組により、生活の中の大事な場面に立ち止まる力が養われてきた。また、自分の課題を見つめようとするところができるようになってきた。不安や悩みを出せるようになってきた。	・人権アンケートで、子どもたちから高い意識数値が上がっており、学校の取り組みが良かったと思う。 ・コロナの影響で、家族の時間を今までより持てるようになってきていると思われるので、家族で話し合えるような話題の提供も進めたい。 ・「人を傷つける言動や決めつけ」がよくないことは、ほとんどの児童が分かっている。しかし、自分のどういった言動がそれにあたるのか、相手がどう感じるのか、というのはなかなか難しく、低学年からの積み重ねが大切だと思う。	・「生活つくり方」を継続し、子どもどうしをつなぐ取り組みを推進する。 ・「安心できる」、「元気になれる」、「自分らしくいられる」人権学習をめざし、いじめや差別につながる身近な出来事に気づき、自分の言葉で伝え合い、解決しようとするなかまづくりに取り組む。
4 生徒指導	・よりよい生活態度、生活習慣の確立	組織的な生徒指導を推進するための生徒指導だよりの発行 * 月1回以上発行	○職員向けの通信として生徒指導だよりを毎週発行した。生活指導事案の全体周知や、情報共有・各クラスでの指導すべき内容等を掲載した。生徒指導だよりの発行により、職員への共通理解を図ることができ、学校全体での統一した指導を行うことができた。 ○児童に対しては、生活面での3つの柱として「あいさつ」「チャイム席」「きれいな学校」を意識して生活するように始業式で生徒指導を行い、「自分から」良い行動をする、クラスみんなで良い方向へ向かえるよう各学年で指導を続けてきた。仕事の流れについては、各学年・クラスでの具体的な指導、定期的に自らかえる活動を取り入れることで自ら考えよう活動や係活動をする児童が増加した。二学期の児童アンケートでは、「当番や係の仕事、児童会や委員会の仕事に楽しんで取り組んでいる。」の質問に対して、96%の児童が「している」とどちらかといえば「している」と回答した。 * 実績値:1学期 10回 2学期 20回	・具体的な指導や振り返ることのできる活動によって、先生に言われたからするのではなく、自ら考えて各活動をする児童が増えていることは評価できる。 ・コロナ禍での教員の方々には、毎日忙しかつ環境も整え、ご苦労を感謝している。 ・生徒指導だよりの発行により、学校全体での統一した指導を行っているとのこと。アンケートでの96%が、その効果を表している。すばらしい。 ・日々の指導の積み重ねから、子どもたちがさまざまな仕事に楽しんで取り組むことができている。このことが、社会の一員として自ら活動に力をつけていくことを期待する。 ・小さな声には、クラスによって担任の対応、声かけが違うこともある。全職員が統一して同じ指導をすることは大切だと思う。	・生活面での3つの柱を重点目標に、全職員が共通した指導を徹底する。 ・全職員で児童の生活実態の把握に努め、常に情報を交流する。適切に指導の見直し、強化等を行い、対応が後手にならないようにする。
	・あいさつ運動の工夫・充実	自然なあいさつをする習慣の育成 * (児童アンケート)「誰にでも進んで挨拶をしている」…80%以上	○生活委員会を中心にあいさつ運動を行った。あいさつ運動後は、委員長が中心となってふりかえりを行うことで、教師からの指導だけでなく、どしたらあいさつが増やせるか主体的に考えることができていた。児童の意見から、「あいさつを返してくれないのは、自分の声から小さいからだった。」と、自分のあいさつの仕方をふりかえれる児童もいた。あいさつを増やす取り組みとして、「あいさつポスターの作成」、「教室を回ってあいさつをする時、みんなが返してくれたと感じるまで、生活委員が声をかけ続ける」など、あいさつに関して主体的に考える姿が見られた。また、教師が各クラスであいさつの大切さを伝えたり、クラスの課題について考え、どうすべきかを児童たちが考える機会を設けた。 * 「誰にでもすすんであいさつをしている。」…1学期 80% 2学期 83%	・あいさつの大切さを子どもたちに考える機会を作っていただけてありがたい。まずは、家庭内でもあいさつができていたことが重要だと思うので、保護者へもあいさつの大切さを啓発していただけたことよいため。 ・学校における取組の成果だと思いが、私の家の前を通学する児童が自ら挨拶してくれ、こちらも大変清々しく感じる。 ・校区内の店から歩道を横切り車道へ出る際に、児童が歩いていたので、歩道前で車を止めたところ、おじぎをしてくれたので、桜島小学校の児童を誇らしく思った。 ・「誰にでもすすんであいさつをする」のはなかなか難しいと思うが、習慣になりつつあるようで、83%のアンケート結果はよい結果だと感じた。 ・マスクの影響であいさつしても聞こえなかったこともあると思うが、それを相手のせいにするのではなく、「自分の声はまだ小さかったんだ」と思える児童がいることは大人の私も見習いたい。	・児童の自主的な自発活動を推進する。 ・地域と一体になって、「自分から進んであいさつができる子ども」を育てる。
5 地域とともにある学校づくり	・命を守る取組の充実	感染予防についての取組、人権尊重の地域への啓発 ・コロナ感染予防対策 ・学校だよりの発行 * 学校だより…月1回以上	○県及び市教育委員会の通知や通達に従い、また、学校区からの意見も取り入れ、教育活動全般において感染予防のための具体的な取り組みを行ってきた。そのため、早い現時点での児童の感染者は出ていない。 ○市内で発生したクラスターにかかわらず、本校の児童が感染したなどデマが拡散した際、即座に人権委員会が中心となって全学級で人権にかかわる授業に取り組み、その件にかかわる学校だよりを発行し、地域に啓発を行った。 ○1月末現在、学校だよりは26号を発行している。 ▲ホームページの更新が滞り、地域への発信ができていない。	・学校だよりは、ホームページに掲載されたり、地域にも配布されているので読ませていただけており、学校の様子が良くなって大変良いと思う。 ・月1回以上の学校だよりによって、学校の考えていることが保護者(や子どもたち)に、よく伝わったと思う。 ・関係部局と連携をとりながら、児童の安全のために日々ご尽力いただいている。 ・コロナ感染に関する差別的な発言は、子どもたちの間でまだまだ聞かれるように思うので、引き続き指導をお願いしたい。 ・先生のマスクの仕方も充分にしてほしい。 ・コロナ感染予防対策について、先生の負担になりすぎないように感染予防対策を先生が行い、それ以上の対策はボランティア等により行うのが良いと思う。	・ホームページの更新を定期的に行うための体制づくりをする。 ・学校での取り組みがタイムリーに保護者や地域へ伝えるよう努める。
	・地域ボランティアの協力体制の推進	地域ボランティアの活用 ・読み聞かせボランティア ・学習支援ボランティア ・「桜の植樹」のための準備等 * 感染状況等を踏まえ、必要に応じて検討したうえで可能な限り実施。	○1学期はボランティアの人数を絞り、必要最小限の活動にとどめたが、2学期以降は感染予防を徹底しながら、学習活動や読み聞かせ等でボランティアが入っていただくことができた。コロナ禍においても積極的に児童の登下校の見守り、声掛けをいただくほか、マスクや石鹸等を届けていただくなど地域の方の温かい支援を受けた。 ▲1学期よりPTAや学校運営協議会、地域の方や樹木医の協力を得て準備を進めてきた桜の植樹を、6年生の卒業記念として1月16日に実施することができた。今後は、子ども、家庭、地域が一つになる学校の象徴となるよう維持管理を継続していくことが課題である。	・桜の花が咲くのを楽しみにしている。 ・マスク不足が言われた初期の時、手作りマスクを作った方だけでなく、作れないけど協力したいとマスク生地やゴム紐を寄付して頂いた方もあり、多くの方が学校や子どもたちに目を向けて頂けたことは有難かった。 ・桜の植樹もまもなく創立40周年を迎える小学校に、愛情をもって頂けている地域の方々のおかげである。 ・コロナウイルス感染予防を徹底しながら、学習支援ボランティア、読み聞かせボランティアの方が入ってもらえたのは、ありがたい。 ・コロナ禍において、できる範囲の活動をしていただけたと思う。このような状況だからこそ、地域の助け、地域とのかかわりが必要であり、そのために日頃より地域との連携を大切にしていると思う。 ・PTA役員との共有と引継ぎが必要と思う。	・感染症予防を行いながら、ボランティアの活用を広げていく。 ・桜の維持管理をどのように継続していくかを、地域と協力して検討していく。